成田市野毛平Ａ遺跡出土の縄文土器二例

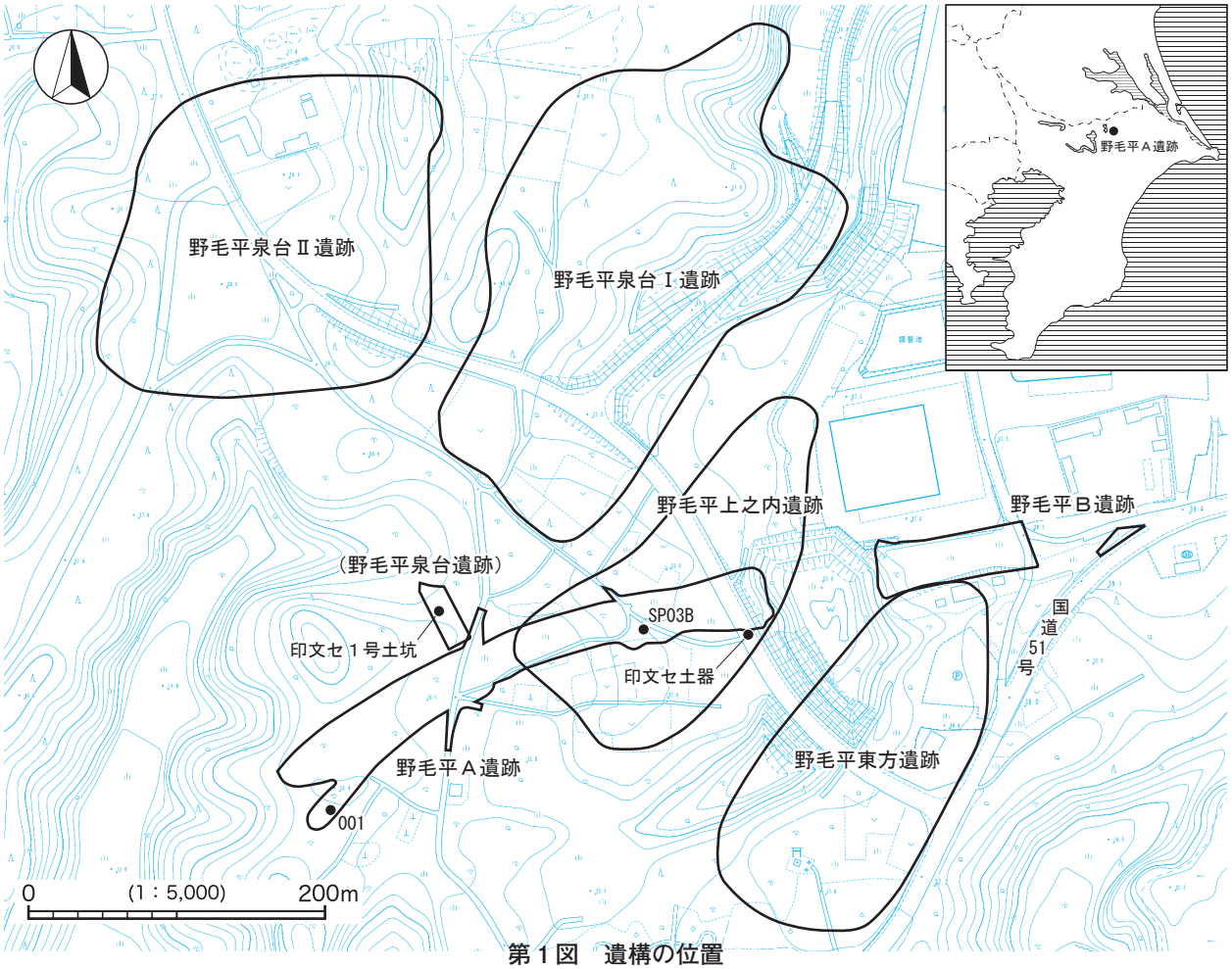
上　守　秀　明

はじめに

成田市野毛平Ａ遺跡から出土している中期前葉阿玉台式の土坑一括資料、後期前葉堀之内１式の成立に関わる土坑単独出土資料について、報告書は未刊行ながらそれぞれ研究上、重要な資料となるため、資料紹介と若干の考察を行う[1)]。

１　調査と遺跡の概要

野毛平Ａ遺跡は野毛平Ｂ遺跡とともに、建設省（現国土交通省）による国道51号線野毛平バイパス建設に伴い、昭和59年度（1984年度）から昭和62年度（1987年度）まで、当財団により断続的に発掘調査が実施された。その後、この事業に伴う発掘調査は調査地以外の用地取得が進捗しなかったためか、事業の中断を余儀なくされ、整理作業は昭和62年度（1987年度）に水洗・注記から記録整理まで実施された後、長らく実施されなかった。その後、平成20年度（2008年度）に野毛平Ｂ遺跡を含め、分類・選別、接合・復元、実測の一部までの整理作業を実施したが、現在は再び事業中断となっている。主な調査成果であるが、縄文時代では中期前葉阿玉台式・後葉加曽利Ｅ式後半、後期初頭称名寺式・前葉堀之内式・中葉加曽利Ｂ式等の遺構・遺物が検出されている。特に加曽利Ｅ式後半期と堀之内式期では集落跡が検出されている。そのほかに旧石器時代の遺物集中地点、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代の集落跡も検出されている[2)]。



第１図　遺構の位置

遺跡は富里市根木名を水源とする根木名川の支流である荒海川の最奥部にあたる、成田市野毛平字西方304他に所在する。本遺跡が一角を占める標高33m～38mの台地は、周囲を支谷によって複雑に開析され、それほど平坦面が広くないいくつかの台地に分かれている。また、台地の南側にも同じく根木名川の支流である取香川の支谷が貫入しており、遺跡が所在する周辺地域は交通の要衝であったと思われ、野毛平上之内遺跡・野毛平泉台Ⅰ遺跡・野毛平泉台Ⅱ遺跡・野毛平東方遺跡をはじめとして、数多くの遺跡が所在している。

遺跡の名称について、ここで触れておく。野毛平バイパス建設に伴う発掘調査は昭和59年（1984年）に開始されるが、おそらく仮称として野毛平Ａ遺跡・Ｂ遺跡と命名して埋蔵文化財発掘届が提出され、現在に至っていると思われる。昭和60年３月刊行の千葉県埋蔵文化財分布地図（１）によれば、周知の文化財包蔵地範囲は現在と異なっており、野毛平バイパスの路線範囲はこの時点での野毛平泉台遺跡や野毛平上之内遺跡の範囲外にあるため仮称となったと思われる。その後、調査歴を反映してなのか否か詳細は不明ながら、平成９年３月に前出の分布地図（１）の改訂版が刊行され、新遺跡の追加、遺跡の位置や範囲の変更、名称の変更などが行われた結果、先述の野毛平所在の４遺跡となっており、ふさの国文化財ナビゲーションに同じく登載されている[3)]。これに当てはめると、野毛平Ａ遺跡とした範囲の東側、全体の約1/2ほどが野毛平上之内遺跡に含まれ、それ以西の野毛平Ａ遺跡と野毛平Ｂ遺跡の範囲は、未だ周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲外のままである。なお、印旛郡市文化財センターによって発掘調査が行われた野毛平泉台遺跡は、改訂版以前に調査が実施されたものであるが、現在の野毛平泉台Ⅰ遺跡からは外れており、現在の野毛平上之内遺跡に隣接している（第１図）。

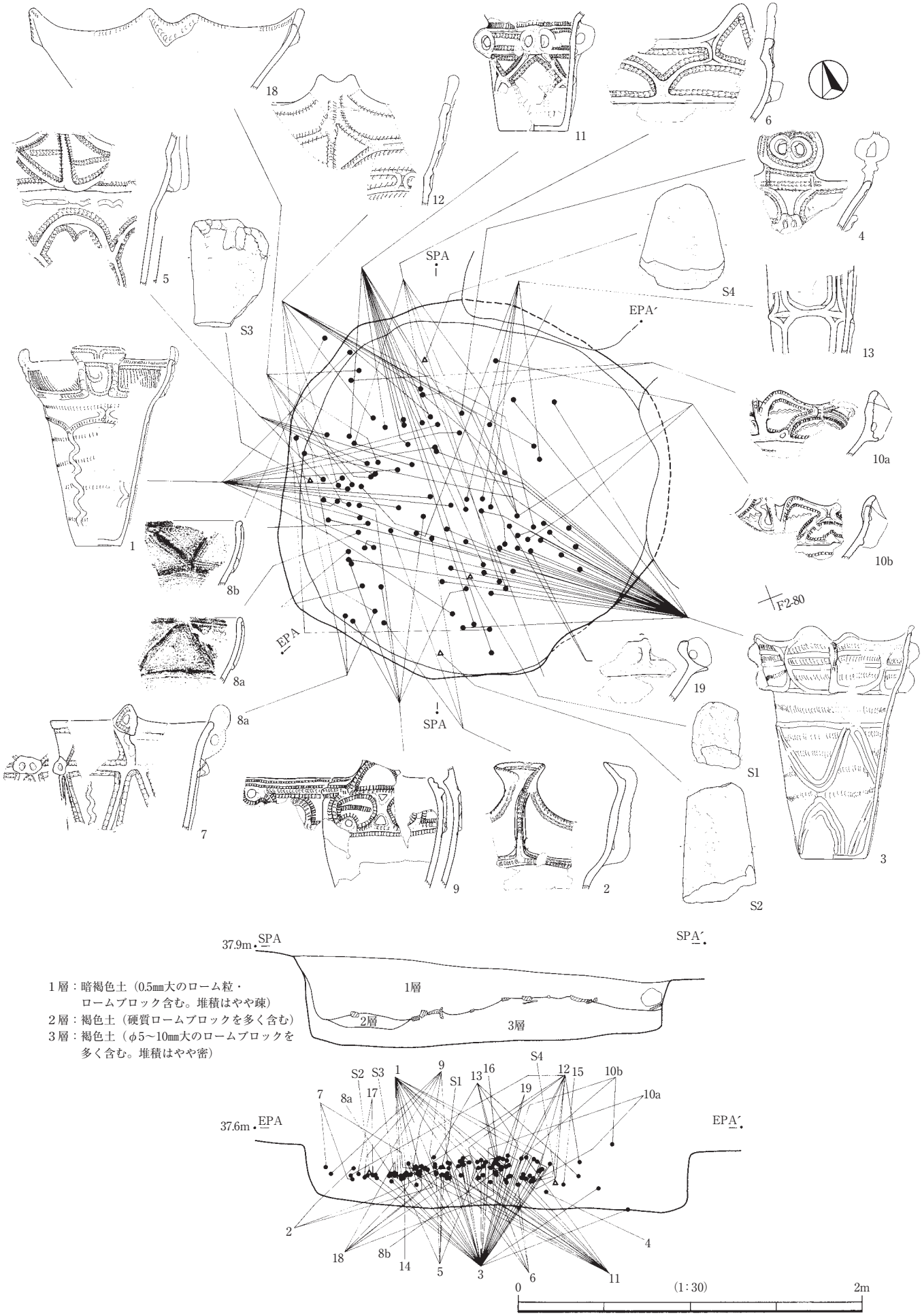
２　中期前葉の遺構と遺物

（１）概要

本遺構は昭和62年度（1987年度）に調査を行った、野毛平Ａ遺跡とした路線予定範囲の西端にあたる調査区のうちF1－79グリッド内に所在しており、001と命名されている（第１図）。周辺は縄文時代以降も含め遺構密度は希薄であり、同時期と思われる遺構もなく、単独での検出である。なお、この調査区は既述のとおり、千葉県の周知の埋蔵文化財包蔵地を登載しているふさの国文化財ナビゲーションの周知の埋蔵文化財包蔵地に、現在のところ含まれていない。土坑の平面形は略円形で、上端は撹乱により一部破壊されるが、径約2.2mを測る。下端は部分的にオーバーハングしているが壁の立ち上がりは垂直に近く、検出面からの深さは最深部で0.51m、タライ状の形態となる。覆土は３層に分層されているが、ロームブロックを含むことから、人為的に埋戻されたと考えられる。後述する遺物は、一部、底面から出土しているものの、２層・３層の上面付近からほとんどが出土していることから、これらの土層により土坑中位まで埋め戻した面に土器・石器を投棄し、その後１層により再度、埋め戻したと推測される（第２図、図版１上段左）。

（２）土器

覆土中位から多量に出土した土器のうち、図示可能なものを第３図－１～第５図－18に示した（図版１・２に一部掲載）。１～17は深鉢である。１は平縁に４単位の扇状把手が付き、口縁部区画文・頸部素文帯・胴部懸垂文の構成が明瞭である。口縁部は刻み目または凹線付き隆起線により枠状区画文が形成され、隆起線に付随して先端を斜めに切った半截竹管の内側を用いた複列の角押文（一部は有節線文）が施される。複列角押文は区画内部や扇状把手、区画文間にも直曲線的に充填される。頸部は無文で、頸部下端には刻み目付き隆起線によりＶ字状の枠状文が横位に連結して形成されるが、Ｖ字の下端から蛇行懸垂文が垂下する。胴部には多段に連続爪形文が巡らされる。胎土中に雲母粒を含む。推定口径31.4㎝、器高43.6㎝を測る。２は波状縁に付く扇を半開きにしたような扇状把手である。波頂部皿状突起から刻み目付きの隆起線が渦巻状に垂下し、枠状区画文に連結するが、この接点は小さな橋状把手となる。皿状突起の縁取りと隆起線には複列角押文が付随する。胎土中に雲母粒を多量、長石粒等を少量含む。３は口縁部から胴部まで、余白を埋めるように多段に連続爪形文が巡らされ、全体的に素文である。４単位の左右非対称の叉状を呈す波状口縁で、中心軸から刻み目付きの魚鰭状の隆起線が垂下し、口縁部の楕円区画文を縦位に分割する。口縁部区画文および区画内を横位に2条に巡る隆起線、頸部帯の区画線、２本組でＶ字対向して４単位の重三角形区画文を形成する胴部隆起線、いずれもやや幅広な断面三角形の隆起線である。胎土中に雲母粒、粗い長石・石英粒を多量に含む。口径34.0㎝、器高は推定で50.0㎝を測る。４は平縁に付く大形の板状把手で、把手中央は隆


SPA
EPA′
EPA
SPA
F2-80
S1
S2
S3
S4
37.9m SPA
SPA′
1層
2層
3層
1層：暗褐色土（0.5㎜大のローム粒・
ロームブロック含む。堆積はやや疎）
2層：褐色土（硬質ロームブロックを多く含む）
3層：褐色土（φ5～10㎜大のロームブロックを
多く含む。堆積はやや密）
37.6m EPA
EPA′
0
(1:30)
2m

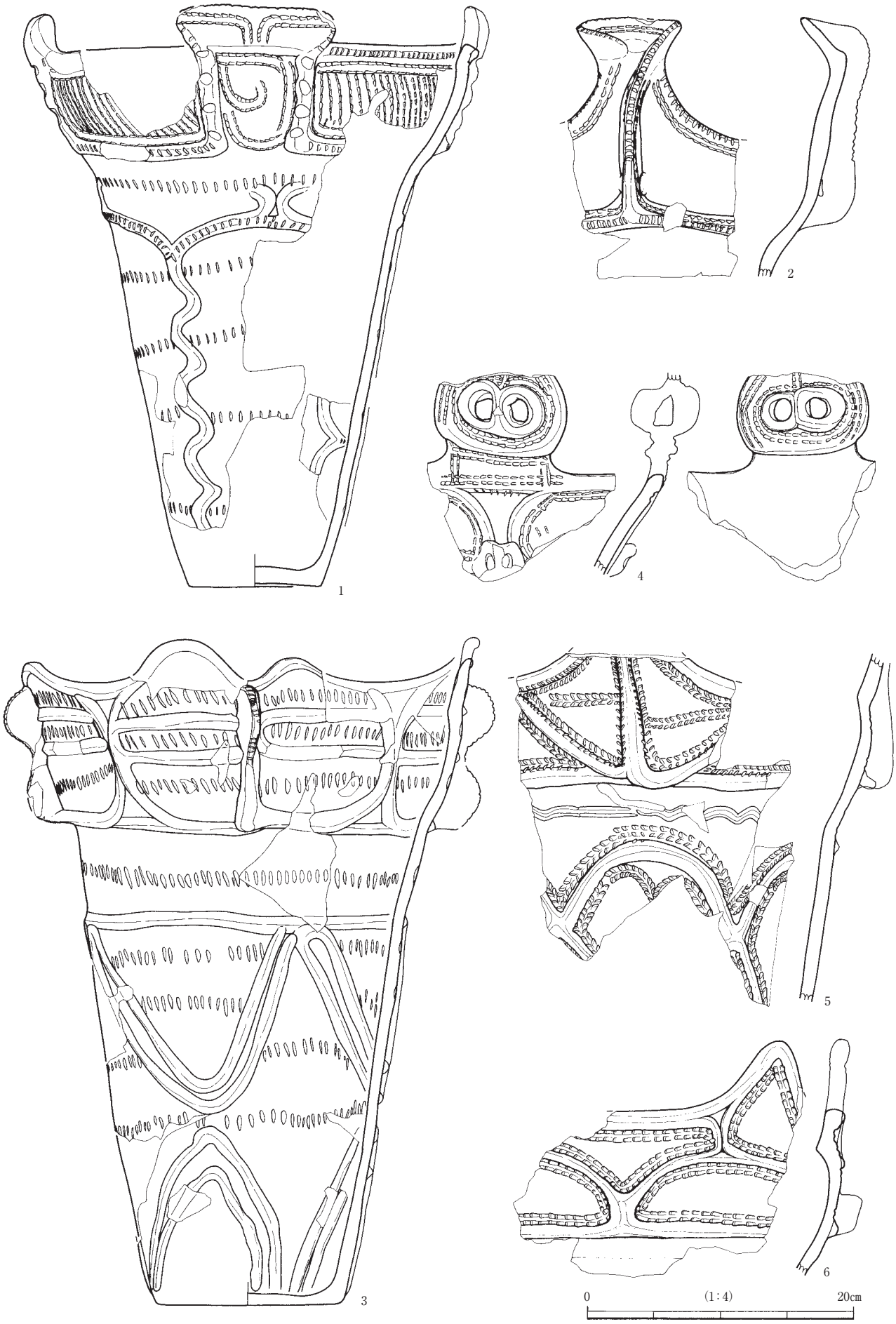
第２図　001

起線により眼鏡状を呈す。把手周縁表裏と表側取り付け基部、口縁部楕円形区画文を形成する隆起線には複列角押文が付随する。区画文の接点は叉状になり、上端には爪形文、下端には眼鏡状の小突起が付される。胎土中に砂粒を多量、雲母粒を少量含む。５は大形の波状縁を呈し、口縁部区画文・頸部素文帯・胴部懸垂文の構成がわかる大形破片である。口縁部には隆起線によって重三角形の区画文が形成されると思われるが、抉りを入れた両先端を斜めに切った半截竹管の内側を用いた複列角押文が付随する。頸部素文帯には同じ施文具を用いた複列の波状沈線文が巡らされよう。胴部には口縁部同様の複列角押文が付随する隆起線が横位に連繋し、Ｘ字状懸垂文として垂下する。胎土中に雲母粒を多量、粗い長石・石英粒を少量含む。６は鋭角な波頂部を有する波状縁で、口縁部には半截竹管の内側を用いた複列複列角押文により、三角形を基調とした区画文が重畳して形成される。胎土中に雲母粒を多量、砂粒を少量含む。７は平縁で片側に角押文が付随した円孔を有した未貫通の突起が付き、欠損部から判断すると橋状把手が連結していたと思われる。頸部素文帯は設けられず、口縁部・胴部は連接して複列角押文が付随する隆起線によって、重三角形区画文が形成される。口縁部・胴部の接点の一部に未貫通の円孔を有す眼鏡状の小突起が付され、胴部区画文内の一部に角押文と同一の施文具により複列の波状沈線文が充填される。胎土中に雲母粒を少量、砂粒を多量に含む。8a・8bは同一個体で平縁を呈す。口縁部には複列角押文が付随する隆起線によって、重三角形区画文が形成され、一部に同一施文具による複列の波状沈線文が縦位に充填される。胎土中に雲母粒を多量、砂粒を微量含む。９は平縁で内湾する器形である。一部欠損するが、内面にはおそらく横向き楕円形となる凹みを有す大形の板状把手が付される。口縁部区画文は狭小幅で、胴部区画文は幅広である。区画文を形成する刻み目付きの隆起線には、キャタピラ文風の幅広な結節沈線文が付随する。狭小な口縁部区画には単列の角押文が付随する。区画文接点は三角系の印刻が対向したり、円環状の貼付文が配されたりする。胴部下半は無文となる。10ａ・10ｂは同一個体で、波状縁を呈す波頂部は叉状となる。叉状部を縁取る刻み目付き隆起線は、口縁部下端の区画隆起線に付着するが、この箇所は橋状突起となる。口縁部には断面に丸みのある隆起線によって、三角形を基調とした区画文が重畳して形成されるが、隆起線にはキャタピラ文風の幅広な結節沈線文が付随する。区画文の接点の一部には円形貼付文が付され、区画内には横位の波状沈線文が充填される。胎土中に雲母粒を多量、砂粒を少量含む。11は口縁部から頸部上半を欠損する。頸部下端には幅広なヘラ状工具による押し引きで、キャタピラ文が巡らされる。胴部上部には眼鏡状突起を接点にして、先端に抉りを入れた半截竹管の内側を用いた複列角押文の区画帯が形成される。以下の胴部には、複列角押文が付随する隆起線によるＸ字状懸垂文が垂下するが、人体文風である。胎土中に雲母粒を多量、砂粒を微量含む。器高は現存高18.8㎝を測る。12は波頂部が叉状となる大形の波状縁を呈す。波頂部から垂下する隆起線を基軸とし、幅広な口縁部には各種図形を組み合わせた区画文が形成される。また、頸部上位にも幅狭な楕円区画文が形成される。隆起線には貝殻復縁による連続刺突が爪形文風に付随する。胎土中に雲母粒を多量、砂粒を少量含む。13は胴部中部が残存するもので、筒形の器形を呈すると思われる。一見すると、中位の横位隆起線を境に縦長の楕円区画文が上下に対向するようだが、上位は複列沈線文が隆起線に付随する縦長の楕円区画文であり、下位はＹ字状隆起線のみの懸垂文である。胎土中に雲母粒を多量、砂粒を少量含む。

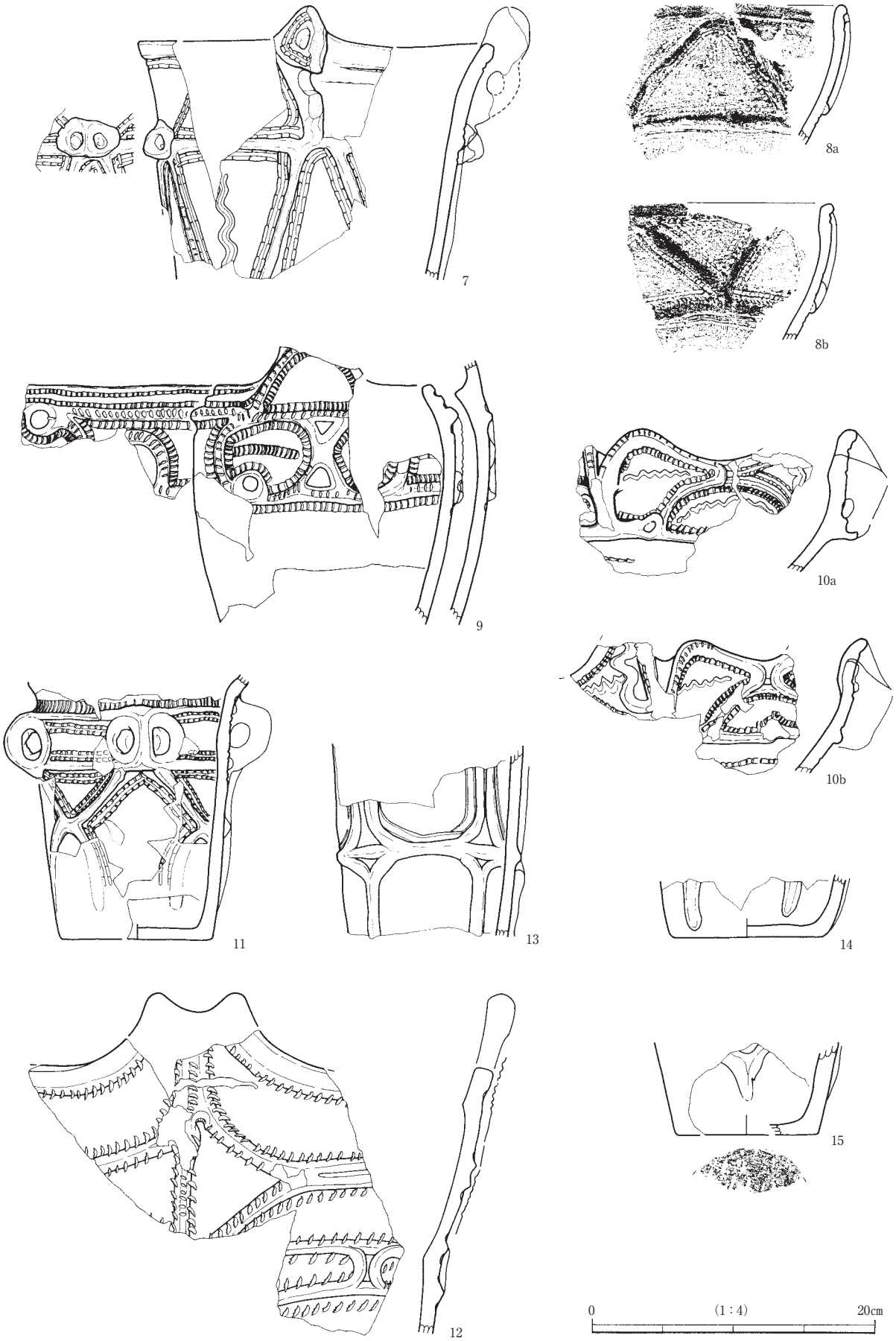
14～17は深鉢の底部である。14は底面近くまで懸垂文が垂下するもので、器高は現存高4.4㎝を測る。胎土中に胎土中に雲母粒と粗い長石・石英粒を多量に含む。15は底面近くに垂下する隆起線が枝分かれするので、Ｖ字状の隆起線が何単位か連繋する可能性がある。底面には網代痕が認められ、器高は現存高4.4㎝を測る。胎土中に雲母粒を多量、摩滅して丸みのある長石・石英粒を少量含む。16は無文で、器高は現存高5.5㎝を測る。胎土中に雲母粒を多量、粗い長石・石英粒を少量含む。17は無文で、器高は現存高8.3㎝を測る。胎土中に雲母粒を少量含む。18･19は浅鉢である。18は波頂部が叉状を呈する４単位の波状縁である。口縁端部と波頂部下に配されるＶ字貼付文には刻み目が付され、以下は無文である。推定口径50.8㎝と大形で、胎土中に雲母粒を多量、砂粒を微量含む。19は口縁部が逆くの字に強く屈曲するもので、口縁端部から下端の区画隆起線に架けて橋状把手が付くが、これを基軸に口縁部に楕円区画文が形成される可能性がある。器高は現存高9.9㎝を測り、胎土中に雲母粒を多量、粗い長石・石英粒を少量含む。

（３）石器

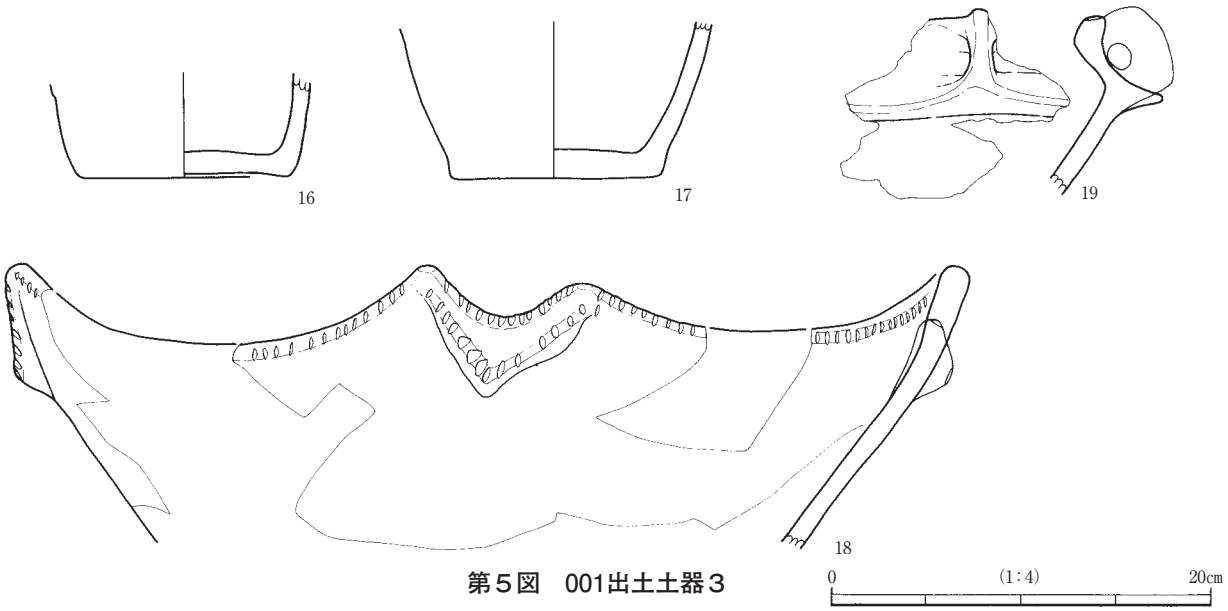
石器も土器と同様に覆土中位から大形の礫などと出



第３図　001出土土器１



第４図　001出土土器２



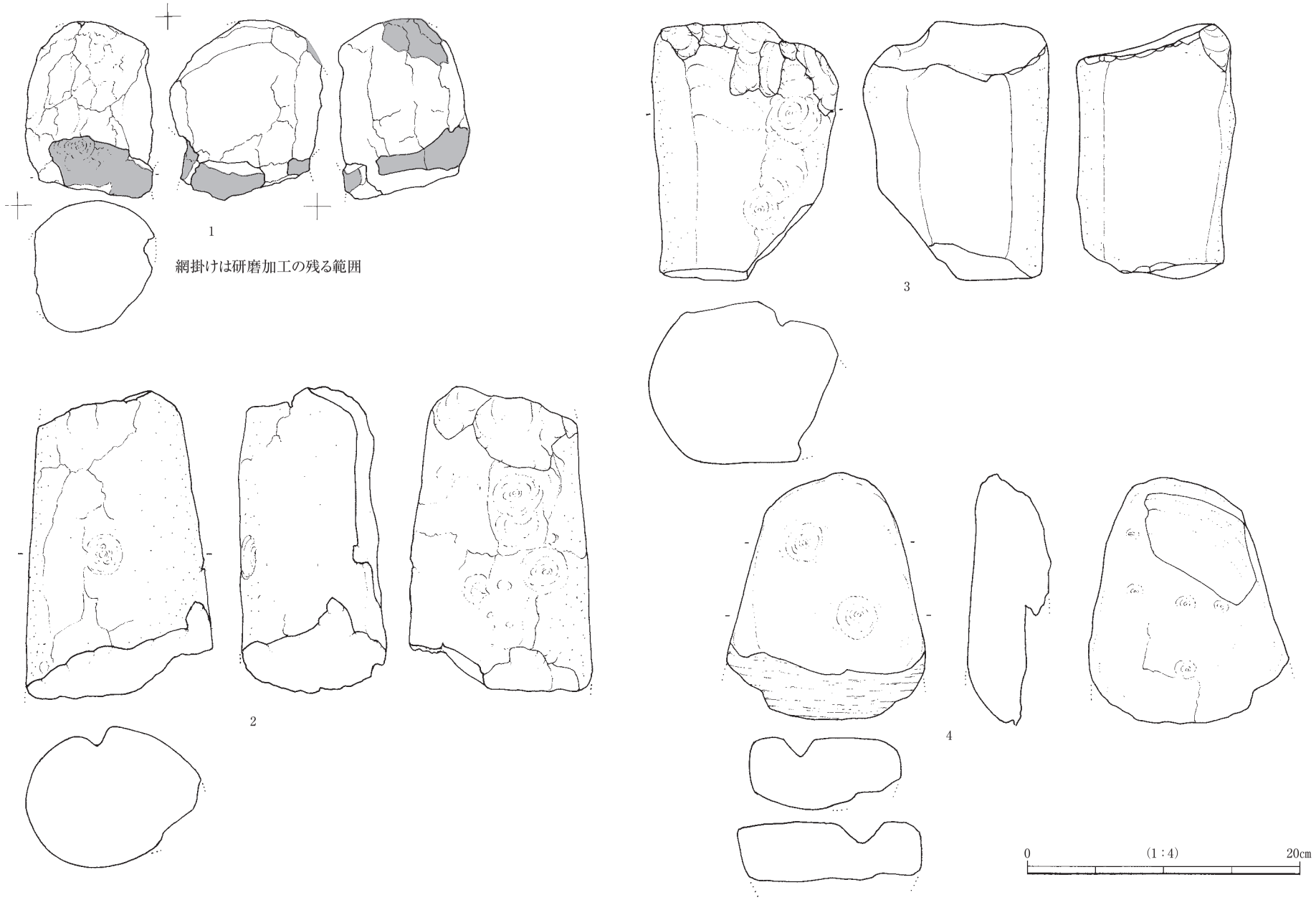
第５図　001出土土器３

土しており、図示可能なものを第６図－１～４（図版２に１・２掲載）に示した。１は破損面にほとんどが覆われるが、上面の丸みやいわゆるカリ状の段差には研磨加工が認められることから、大形有頭石棒の頭部片と考えられる。カリ状の段差に掛かって凹みが認められることから、磨石類に転用されたと思われる。長さ13.2cm、幅8.4cm、厚さ9.6cm、重量1,620ｇを測る。２は剥落部を除き、全面に磨製加工が施された棒状礫片である。上下端とも欠損するが、上部に向かって漸次、細身になっており、断面形が楕円形を呈するので、大形石棒の体部の可能性がある。表面に１か所、裏面に２か所の凹みが認められることから、磨石類に転用されたと思われる。長さ22.8cm、幅13.7cm、厚さ10.7cm、重量4,000ｇを測る。１・２は接合しないが、いずれも安山岩製で、被熱による赤化、ヒビ、破損が認められ、同じく磨石類に転用されていることから、同一個体の可能性が高い。３は両端および側面を欠損する花崗岩の棒状礫を利用した石器である。表面に凹みが２か所、認められることから、磨石類として用いられたと思われる。長さ19.0cm、幅13.5cm、厚さ11.3cm、重量4,060ｇを測る。４は白雲母片岩の板状礫を利用した石器である。全体的に風化が著しく、裏面は大部分が剥落しているが、表面に２か所、裏面に５か所の凹みが認められることから、磨石類としてよいであろう。長さ18.1cm、幅15.2cm、厚さ5.6cm、重量1,690ｇを測る。

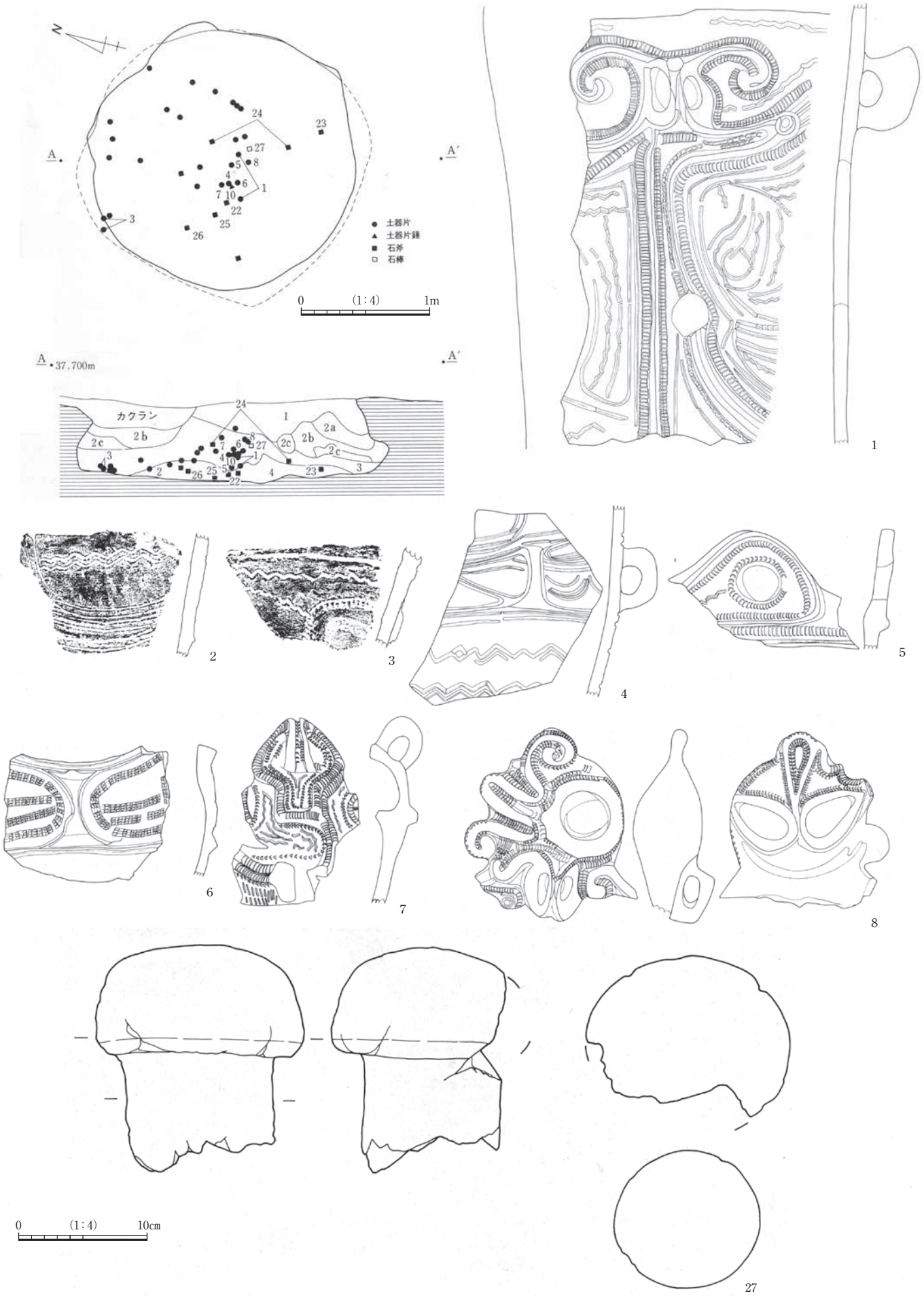
（４）若干の考察

ここでは、遺構内から一括出土した土器群の編年的位置付けと、これらとともに埋め戻し土中位から被熱を帯びて出土した石棒について、いくらか私見を述べておきたい。

出土土器は冒頭で記したように阿玉台式土器で、今日、最も基本となる西村正衛氏の編年的研究に照合させれば、阿玉台Ⅱ式と阿玉台Ⅲ式の特徴を備える土器群であることが指摘できる[4)]。最も型式細分の指標となった隆起線に付随する文様の差異を示すと、１・２・４～８は押し引き手法による複列の角押文（一部、施文具の先端を加工したものを含む）、13は押し引き手法によらない複列の沈線文でⅡ式の文様要素である。一方、９・10・12は幅広な施文具による連続爪形文が付随するもので、Ⅲ式の文様要素である。また、11は基本、複列角押文が隆起線に付随するが、連続爪形文も異なる部位に施文され、Ⅱ式・Ⅲ式の文様要素が同一個体中に併存する。次に文様帯の構成がわかるものや特徴的な属性により、隆起線に付随する文様要素を指標とした細分を見てみる。１は扇状把手を有し、口縁部区画文・頸部素文帯・胴部懸垂文の構成が明瞭なⅡ式、２は破片ながら扇状把手の形状からⅡ式である。なお、３は１の胴部に多段に巡る連続爪形文が全体に施されるが、この文様は阿玉台Ⅰb式のひだ状文が変化したものなので、Ⅱ式としてよいであろう。５・７・９・11は、阿玉台Ⅰb式以来の口縁部区画文・頸部素文帯・胴部懸垂文の構成は崩れる。５は頸部素文帯が維持されているが、胴部の懸垂文は区画文化している。７・９は頸部素文帯が消失して口縁部と胴部が連接し、胴部にも区画文よる加飾が認められる。11は頸部にも連続爪形文が加えられ、体上部では眼鏡状突起を有する区画文、体下部では懸垂文が人体文風になるなど、加飾されている。勝坂式の影響は、４・７・９～11の把手・突起の付加に認められる。西村の編年的研究に



第６図　001出土石器



第７図　野毛平泉台遺跡１号土坑（吉林1996　第４・５・８図を改図転載）

よれば、勝坂式の影響は阿玉台Ⅱ式においては三角形区画文などに看取される程度で、阿玉台Ⅲ式になって幅広の角押文、把手などより影響を受けた要素が加わるとしている。

それでは出土層位などの状況から一括性が高いこの土器群の編年的位置付けを、今日的にはどのように捉えたらよいのであろうか。塚本師也氏は栃木県北部における中期前葉から中葉の土器編年を論じる上で、千葉県柏・松戸市域を中心とする下総台地の阿玉台式土器を分析した。下総台地では阿玉台Ⅱ式土器のみの一括資料が少なく、柏市大松遺跡・松戸市子和清水遺跡など下総台地北部では阿玉台Ⅲ式と共伴する事例が多いことを指摘した。そして、型式学的な検討を加えてこの段階を阿玉台Ⅲ式古段階とし、Ⅲ式のみの新段階と細分した。細分の指標としてこの段階のⅢ式には縄文が施文されないこと、文様帯構成の基本はⅡ式を踏襲するが、胴部中段に幅広な楕円区画文を配す土器が出現して一定量を占めること、隆起線に付随する押し引きが複列角押文、爪形文と異なる両者があるものの、文様構成と口縁部断面形はほぼ同じであることなどをあげた（塚本2019）。大村　裕氏は埼玉県飯能市堂前遺跡第２次調査１号住居址出土の阿玉台Ⅱ式を、下総考古学研究会の勝坂式土器編年のⅡ式とⅢ式に伴うものに類例とともに細分を検証した上で、勝坂Ⅱ式と対応する阿玉台Ⅱ式、勝坂Ⅲ式に対応する阿玉台Ⅱ式土器というように、阿玉台Ⅱ式を古と新に分けた（大村1991）。西川博孝氏は大村裕の阿玉台Ⅱ式Ⅱ細分を念頭においた上で、柏市大松遺跡・小山台遺跡Ｂ区の阿玉台Ⅱ式を古段階・新段階に分けた。西川氏はⅡ式後半に阿玉台式系統と勝坂式系統の融合が認められるキメラ土器が少なからず存在することから、従来、阿玉台Ⅲ式になって勝坂式の影響を強く受けるとされていたものが、融合が前段階から始まっていたことに注目し、Ⅱ式を細分したと思われる（西川2011）。本資料には勝坂式といえる土器は含まれないことから、大村氏が行ったような勝坂式を組み合わせた検証はできない。本資料は西村編年のⅡ式とⅢ式が一括して出土していることから、塚本氏が提起しているように、このような土器様相から阿玉台式の編年的研究に充分アプローチできる内容を持つと思われるが、今回はⅡ式あるいはⅢ式の細分によって一段階を設定しうる、良好な資料であるとの指摘にとどめておく。

大形石棒はこれらの土器群に伴って出土していることから、既述した阿玉台式の時期に比定される。有頭の大形石棒は、八ヶ岳山麓の中期初頭の事例を初源とする（長田他2020）。東関東地域では隣接する野毛平泉台遺跡の阿玉台Ⅱ式・Ⅲ式に伴った事例、茨城県取手市西方貝塚出土の阿玉台Ⅳ式に伴った事例[5]が古く、中期後葉以降に事例が増加するまでやや断絶気味である。本遺構から約155ｍの位置に所在する野毛平泉台遺跡１号土坑例は有頭部の破片で、本例と平面形がほぼ同規模の土坑からの出土である。土器・土器片錘・打製石斧・磨製石斧が伴出するが、土器と石棒を図示した（第７図）。土器は本例のように阿玉台Ⅱ式・Ⅲ式の特徴を備えており、勝坂式の把手も含まれる。石棒は報告書によれば石英斑岩製で、被熱の有無については記載がないが、時期と出土状況、何よりも同一遺跡の可能性がある点から注目しておく。西方貝塚例は本例と同じく安山岩製で、廃絶された竪穴住居の柱抜き取り後の柱穴に埋納された状態で出土した。また、彫刻面を裏側にして置いた状態で、熱されていることが指摘されており（鈴木素1999）、本例とともに被熱を伴う儀礼・祭祀など、意図的な行為が想定される。

３　後期初頭～前葉の遺構と遺物

（１）概要

本遺構は昭和60年度（1986年度）に調査を行った、野毛平Ａ遺跡とした路線予定範囲の中央から東端近くの調査区のうちD6－30グリッド内に所在しており、SP03Bと命名された土坑である（第１図）。周辺には古墳時代・古代の住居跡が数件検出されており、該期集落跡の一部となる。縄文時代の遺構は希薄で同時期と思われる遺構はなく、単独での検出である。なお、この調査区は既述のとおり、千葉県の周知の埋蔵文化財包蔵地を登載しているふさの国文化財ナビゲーションの周知の埋蔵文化財包蔵地のうち、野毛平上之内遺跡の範囲に含まれている。

平面形は楕円形で、上端は撹乱坑であるSP03Aにより上端が部分的に破壊されるが、長径約1.0ｍ、短径約0.84ｍを測る。下端は僅かにオーバーハングする箇所が多く、断面形はややフラスコ状を呈す。検出面からの深さは、最深部で0.72ｍを測る。覆土は５層に分層されている。各土壌の構成割合により色調が異なるが、黒色粒･ローム粒（２層はロームブロック）･砂粒･灰白色物質よりなる土層である。なお、調査時の土層注記によれば、灰白色物質は骨粉状のものとされているが、委細不明である。詳細は後述するが、５層上面に４単位の突起のうち３単位を意図的に打ち割って取

り去った深鉢が、把手が残存する面をほぼ上側に向け、横倒しの状態で埋置されたと考えられることから、１層から４層は､埋戻し土とみてよいであろう（第８図)。

（２）土器

出土した土器は図示した１点である（第８図－１)。１は把手となる大形の波状縁で、現存するのは半筒状の１単位だが、残存部の状況から突起は４単位付されたと考える。突起の付く口縁部は幅狭で、逆くの字に屈曲するⅠ文様帯となるもので、把手の基部とつながる部分以外は無文帯となる。突起は地文に縄文が施されるが、両側縁に沿って３条の沈線が付され、基部では直交して２本の短沈線が突起と口縁部無文帯との区切りを付けている。斜めにせり上がる波頂部の上面には、両端に８の字文を配したＣ字文が貼付される。

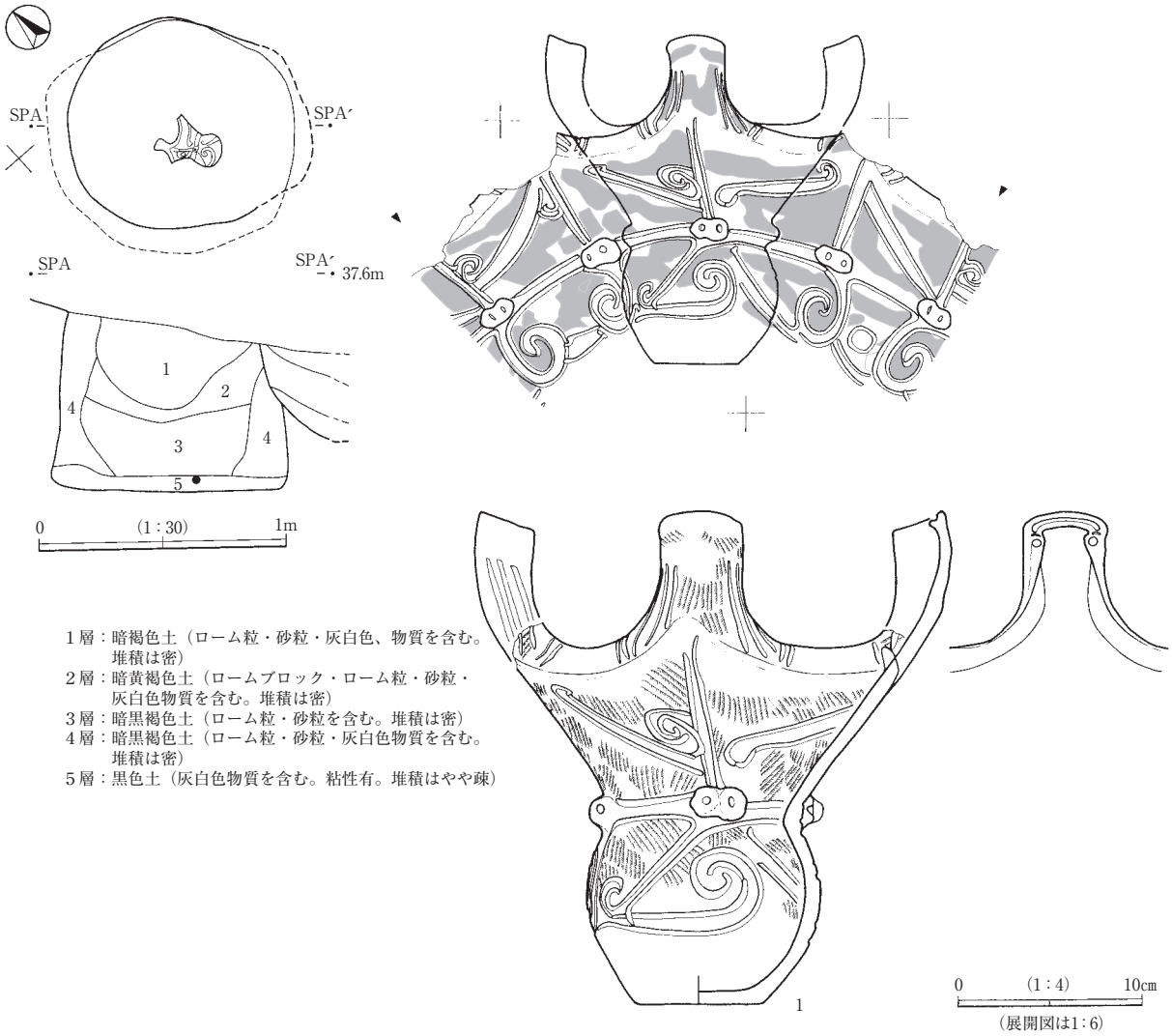
頸部と胴部の境にある強い括れの上下で、Ⅱ文様帯とⅢ文様帯が形成される。幅広な頸部は、波頂部から２本の沈線により描出された無文の帯状部が括れにある横８の字状貼付文へ垂下して縦位に四分割する。この無文の帯状部（懸垂文）の描線の脇には、１単位を除いて鉤状（一部渦巻状）の描線が付着する。これらの単位文間には、傾きは左右交互となる無文の帯状部が襷掛け状となる斜行文が配され、全体が横位連繋した意匠となる。なお、斜行文の末端に鉤状の描線が加えられるものもある。胴部は本来、括れ部の横８の字状貼付文を基幹として、無文の帯状部によるＪ字・逆Ｊ字状の意匠が主文様として交互に配し、主文様下端を無文の帯状部で横位に連繋する構図であったと思われる。しかし、突起の残存する位置ではＪ字状の意匠が垂下せず、先端が鉤状となる襷掛け状の帯状部＝斜行沈線文となり、右側の斜行沈線文とともに、隣り合う主文様の下端に付着する。この位置では主文様下端を繋ぐ無文の帯状部が巻き上がって、交互に繰り返されるＪ字・逆Ｊ字状の意匠の効果を担うとともに、この範囲のみ主文様を斜行文が挟む構図となる。なお、主文様間の１か所に１本沈線により隅円四角形の意匠文が充填される。地文縄文はナデ消されている範囲があり、一見すると磨消縄文と思われるが、無節Ｒが横位を基調として、縦位、斜位にも施されることから、各意匠文描出後の充填縄文と思われる。口径18.5㎝、器高26.8㎝を測る。

（３）若干の考察

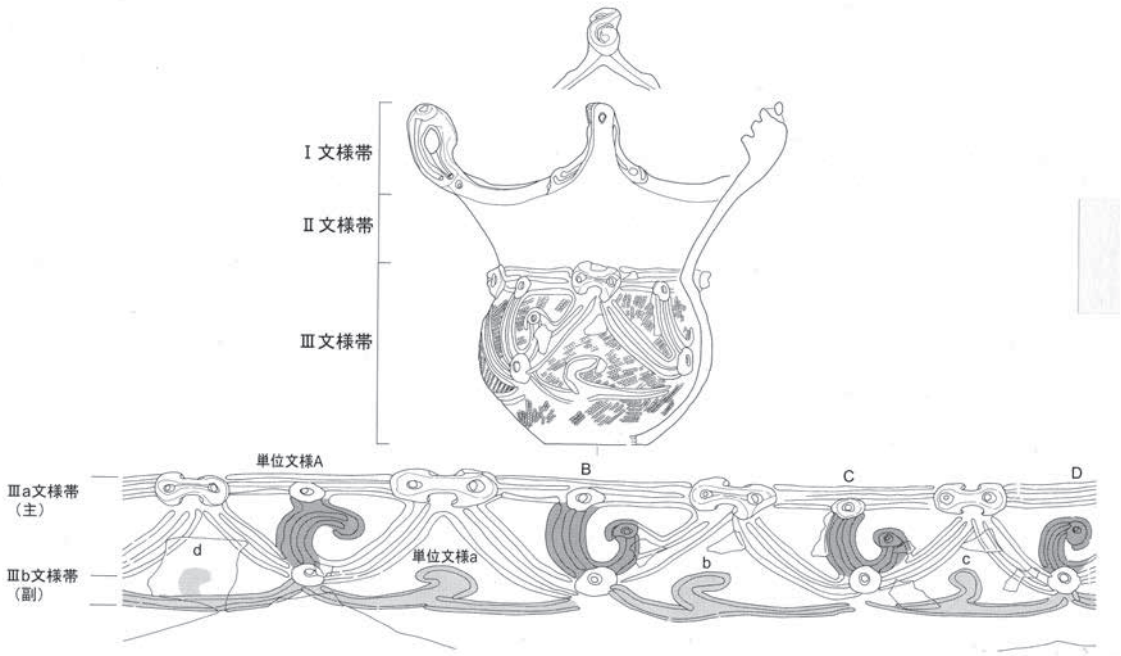
ここでは、土器の編年的位置付けと口縁部の把手の欠損について、いくらか触れておきたい。冒頭に記したように、この土器は後期前葉堀之内１式成立期の複雑な様相を内包する資料である。堀之内１式成立の前段階である称名寺式期終末においては、成立段階以来、加曽利Ｅ式系統の「関沢類型」や後期初頭の西日本系ならびに東北系の土器型式からの影響など、非常に多くの土器系統の流れがあり、終末期から堀之内１式への移行期には複雑な様相を呈している。これについては石井　寛氏が簡潔明瞭にまとめている（石井1992）[6]。また、鈴木徳雄氏は堀之内１式の成立について、Ⅰ文様帯の装飾帯としての効果を主に、称名寺式の新しい部分との差異を論じている[7]。これらの視点をもとに本遺跡例を瞥見する。内屈する口縁端部の形態、頸部から底部に続く断面形態、頸部と胴部の意匠は２本の沈線で区画される無文の帯状部で描出、意匠の描線は基本的に不交叉という諸点は、称名寺式に特徴的に見出せるものである。頸部文様帯・胴部文様帯無文の帯状部による斜行文で横位連繋する構図は、称名寺式終末期に見られ、堀之内１式矢作類型にも看取される（鈴木徳1998・加納2019)。胴部文様帯の意匠は関沢類型からの流れ、胴部下端の区切りは関沢類型乃至大木10式の手法の取入れなどが考えられ、把手上面のＣ字文は綱取Ⅰ式の文様要素である。また、短く内屈する口縁部文様帯は無文で、把手・突起の意匠間を横位沈線で連携する装飾帯にはなっていない。以上のように堀之内１式の成立に関わる複雑な様相を呈している。

野毛平上之内遺跡では印旛郡市文化財センターによる調査資料に、比較検討できる類例が存在する（第９図)。この土器は遺構外出土とのことであるが、僅かに掘り窪められたような場所で正位に置かれたような状態で出土しており、本遺構例とは約70m離れた至近の位置にある。調査報告書では「称名寺式から堀之内式移行期の一様相」として堀之内１式の成立期に位置付け、①器形と文様構成　②円形貼付文を先端に付したＪ字状文　③横位の８の字状貼付文　④胴部文様帯の単位文様を斜行沈線や弧状沈線で連結する構成　⑤胴部文様帯の下位の区画描線を兼ねて、副文様（銛先状文）が主文様の下位に配置　以上の５点について、主として東北・関東・中部地方、一部西日本の該期資料を詳細に比較検討した考察を行っている（小倉2010)[8]。

本遺構例との共通点は、①全体の断面形態と内屈する口縁部形態という器形の共通点　②意匠が無文の帯状部で描出される点　③頸部と胴部の境となる括れに横８の字状貼付文を配置する点　④細部は異なるもの、



第８図　SP003B



第９図　野毛平上之内遺跡遺構外出土土器の文様帯区分と文様展開図（小倉2010　第87図を転載）

胴部の単位文様を横位沈線斜行文で連繋する点　⑤細部は異なるものの、把手を口縁部無文帯と沈線による意匠で区切る点、以上の５点である。本遺構例との相違点は、①頸部文様帯を縦位に分割して斜行文で連繋するのに対して無文となる点　②無文の帯状部による意匠の描線や連繋する描線の先端や連結点に円形貼付文が付く点　③地文縄文の施す範囲が異なる点　④綱取式系の貼付文の貼付け位置が異なる点（そもそも意匠文が異なる）、以上の４点である。この２点の土器は相当な近縁関係の下で製作された可能性があると思われ、その先後関係を即答するのは相当難しいと考えるのは、堀之内１式成立過程の複雑さから妥当と言えよう。しかしながら、口縁部を巡る沈線と突起を主とする所謂「Ｉ文様帯」の形成によって堀之内１式の成立と捉えるならば、これら土器群はその直前乃至堀之内１式に残存する称名寺式系の土器と位置付けることとしておきたい。

次に口縁部の欠損状態について付記しておく。欠損の範囲は、口縁部に把手の付された範囲である。破断面はそれぞれ風化が著しいことから、土坑への埋納以前に何らかの理由で欠損したと考えられ、さらに観察すると、割れ口はほぼ水平になっているがわかる。橋本勝雄氏によれば、破損等による通常の割れ方では水平になることはないという。土器の内面に当て具として石器を添え、外面から注意深く石器により敲打した場合（両極的な打法）によれば、このような割れ口が生じることが氏の実験によりわかった。このことにより、埋納する以前のいつの段階にどんな目的によるものかは不明ながら、意図的に３つの把手をこの土器から割り取った行為が想定される。既述した第９図の土器も４単位の把手のうち、２単位が欠損、１単位が半損している。また、市原市武士遺跡では同一個体の３単位の把手が土坑内から出土して、口縁部以下は部分的に遺構外から出土している後期初頭中津式の事例がある。このような類例の増加により、把手部分を意図的にとりはずした何らかの目的について、類推することが可能となるかもしれない。

おわりに

以上、野毛平Ａ遺跡のほんの一部の成果であるが、公表を果たした。最後に簡単にまとめておきたい。

⑴　遺跡名称について整理し、調査範囲はすべて周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲に組み込む作業が必要である。

⑵　阿玉台式期の土坑一括資料は、編年的研究に資するには充分な内容である。また、東関東としては最古級の有頭大形石棒が伴う点でも重要な事例である。

⑶　称名寺式から堀之内１式成立期にかけての複雑な土器様相を背景として製作された該期土器が、土坑内に埋納された事例を示した。この土器は何らかの理由で、４単位のうちの３単位の把手が意図的に割り取られ欠損している稀有な事例である。

今回、注１に示した事由により整理作業を行った結果、このような成果を導くことができたわけであるが、未整理の資料の中にも、新たに千葉県の歴史を塗り替えるような内容が含まれている可能性がある。発掘調査から既に30年以上が経過しており、当時の発掘担当者は既に退職し、記録も記憶も風化が著しい事態である。何よりも遺跡の記録保存の完遂を果たすため、関係諸機関の尽力を切に願う次第である。

拙稿をまとめるに当たって多くの方々から御指導、御協力を賜った。末筆ながら御芳名を記し、深謝の意を表したい。大内千年・小倉和重・加納　実・栗田則久・黒沢　崇・島立　桂・鈴木素行・塚本師也・橋本勝雄・服部智至・平井真紀子（五十音順、敬称省略）

注

１）論考の対象となった資料を取り扱うきっかけは、令和２年（2020年）４月後半から約３か月間に、当財団本部の整理体制を維持・継続することを目的として、中期縄文土器の実測・トレースの基本的ルーチンを決め、マニュアル化するための作業を行ったことによる。作業は、筆者と整理補助員により育成グループを編成して行い、補助員賃金は管理費から支出した。整理作業の進捗状況を見定め、未整理でコンパクトにまとまっていた本資料を選択した（１点、後期初頭～前葉の資料を含む）。資料化するにつれてその重要性が認識されたので、内容を公表すべきと考えた。

２）（財）千葉県文化財センター年報の記載によれば、昭和60年（1985年）１月10日～３月30日に野毛平Ａ遺跡・野毛平Ｂ遺跡の確認調査、昭和60年12月２日～昭和61年（1986年）３月26日に野毛平Ａ遺跡の確認調査・本調査、昭和61年12月１日～昭和62年（1987年）３月23日に野毛平Ａ遺跡の本調査、昭和62年12月１日～12月28日に野毛平Ａ遺跡・野毛平Ｂ遺跡の本調査、昭和63年（1988年）１月４日～３月31日に整理作業、平成20年（2008年）９月16日～平成21年（2009年）３月31日まで整理作業をそれぞれ実施している。

３）昭和60年刊行の分布地図では、野毛平バイパスの路線範囲を挟んで、概ね北西側に野毛平泉台遺跡、南東側に野毛平上

之内遺跡が所在している。平成９年刊行の分布地図改訂版では、若干の範囲変更はあるが、昭和60年版で野毛平上之内遺跡としていた範囲を概ね踏襲する形で、野毛平東方遺跡と名称変更がなされた。野毛平上之内遺跡は平成９年改訂版では、仮称野毛平Ａ遺跡とした範囲と昭和60年版で野毛平泉台遺跡とした範囲を一部取り込みながら、遺跡の位置・範囲などが大きく変更された。昭和60年版で野毛平泉台遺跡とした範囲も、平成９年改訂版では大きく改変されている。既述の野毛平上之内遺跡への一部編入以外では、昭和60年版の香取台遺跡、仲原田遺跡との統合・再編成によって、野毛平泉台Ⅰ遺跡、野毛平泉台Ⅱ遺跡と変更された。野毛平Ａ遺跡とした概ね1/2の範囲と野毛平Ｂ遺跡の範囲、現在は周知の埋蔵文化財包蔵地範囲外となってしまった印旛郡市文化財センター調査の野毛平泉台遺跡の範囲は、地形等を考慮して周知範囲の変更による編入や、周知の埋蔵文化財包蔵地として追加する必要がある。その後、平成19年（2007年）～平成21年（2009年）に成田市道である野毛平西和泉線改良工事に伴い、印旛郡市文化財センターにより、野毛平上之内遺跡・野毛平泉台Ⅰ遺跡・野毛平泉台Ⅱ遺跡・野毛平東方遺跡の一部が調査された際には遺跡範囲が改変されているが、ふさの国文化財ナビゲーションには反映されていない。また、ナビゲーションの４遺跡の周知範囲は、沖積地まで中途半端に線引きされていたり、台地が続いていても道路境で収束していたりという状況であるため、全体的な見直しが望まれる。

４）西村氏自身が行った、利根川下流域の白井雷貝塚・木内明神貝塚・阿玉台貝塚などの発掘調査における層位的所見と、隆起線に付随する押し引き手法の文様の差異とその変遷を組み合わせた編年である。なお、今回取り上げたⅡ式とⅢ式については、その層位的な分別は捉えられておらず、上下層での数量差により、文様の差による細分を補強している。

５）鈴木素行氏によれば、西方貝塚例は男女の生殖器を表現した陰刻が側面に認められる稀有な安山岩製のもので、北陸地方との関連が想定されている。

６）称名寺式の段階変遷を述べる中で堀之内１式初頭の土器群に触れ「称名寺式土器第７段階の延長上に堀之内１式土器が存在する。第７段階を構成した類型としてはＡ・Ｂ群を除くすべての類型が確認できたが、その中で称名寺式土器の流れの中で主体を占めてきたＣ群、上下２帯構成をとるＦ群、口縁部文様帯を有するＧ群の存在が顕著であった。更にそこに「関沢類型」から変化した一群、規定の問題を残す綱取Ⅰ式、そして大木10式の構成を伝える一群が加わりながら堀之内１式に推移していく。しかしその間の変遷もまた極めて漸移的であり、一線を画すに難渋する土器群はここでもかなりの数存在する」と記し、堀之内１式成立過程の複雑さについて、正鵠を射た表現で示している。

７）称名寺式の新しい部分について「類型的な差異が生じると共に系統が錯綜・多極化し、称名寺式に長らく維持されてきた原則が急速に変容していく過程」として捉え、称名寺式終末の１類型である茂沢類型における突起（関沢類型の捻転状突起周囲の装飾から発生）間を単一の沈線で連繋する装飾帯を介して「堀之内１式の所謂「Ⅰ文様帯」が形成されたと考えることができる」、すなわち「口縁部を巡る沈線と突起を主とする所謂「Ⅰ文様帯」の形成によって堀之内１式の成立を捉え返すことができるであろう」としている。そして、堀之内１式は同式の諸類型にある形態や「Ⅱ文様帯」の差異性を「Ⅰ文様帯」が統合する関係性が獲得できたものとし、称名寺式終末の多様性は「称名寺式強固な体部文様の統合方式と文様施文の原則に揺らぎが生じるような、関係性の急激な変化に対応するものであろう。すでに一部では堀之内１式のいくつかの“類型”への傾斜が開始されているとはいえ、それぞれが“類型”として安定せず、変遷の振幅を内包している状態が該期の存在形態である」と堀之内１式との差異を論じている。

８）本文で既述した５点により検討した結果「本遺跡例が在地の称名寺式から純粋に醸成されたものではなく、福田k2式に代表される関西地方の土器に影響を受けた西関東地方の要素（器形と横位展開する胴部文様の構成）と東北地方南部の要素（円形貼付文の施し方と地文の縄文）が１個体の中に統合されたものとして理解することができる」としている。

引用・参考文献

石井　寛　1992「称名寺式土器の分類と変遷」『調査研究集録』第９冊　（財）横浜市ふるさと歴史財団

大村　裕　1991「型式細分の方法に関する一つの試み－埼玉県飯能市・堂前遺跡第２次調査１号住居址出土土器の分析を中心に－」〈小特集　－層位論－〉『下総考古学』12

大村　裕　2020「西村正衛による「阿玉台式編年的研究」完成の前段階」〈小特集〉阿玉台式土器の研究（2）[研究史]『下総考古学』25

小倉和重　2010「第６章　まとめ　第１節　野毛平上之内遺跡遺構外出土の後期土器について－称名寺式から堀之内式移行期の一様相－」『千葉県成田市野毛平東方遺跡・野毛平上之内遺跡・野毛平泉台Ⅰ遺跡・野毛平泉台Ⅱ遺跡』（財）印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第280集

長田友也他　2020『縄文石器提要』㈱ニューサイエンス社

小澤政彦　2020「埼玉県埋蔵文化財事業団『縄文中期土器群の再編』における阿玉台式土器の記載の検討」〈小特集〉阿玉台式土器の研究（2）[研究史]『下総考古学』25

加納　実　2004「第２節２遺物」(1) 運ばれてきた土器」『千葉県の歴史』資料編考古４（遺跡・遺構・遺物）
加納　実　2019「堀之内１式土器研究の現状－千葉県域資料を中心に－」『東海からみた後期前葉土器群その２』東海状文研究会第８回例会予稿集
小林謙一　2020「西村正衛の阿玉台式土器研究の軌跡－「阿玉台式土器編年的研究の概要」（文学研究科紀要第十八号）を中心に」〈小特集〉阿玉台式土器の研究（2）[研究史]『下総考古学』25
(財) 千葉県文化財センター　1985『千葉県文化財センター年報』№10
(財) 千葉県文化財センター　1986『千葉県文化財センター年報』№11
(財) 千葉県文化財センター　1987『千葉県文化財センター年報』№12
(財) 千葉県文化財センター　1989『千葉県文化財センター年報』№13
(財) 千葉県文化財センター　2009『千葉県文化財センター年報』№34
下総考古学研究会　2004「〈特集〉房総半島における勝坂式土器の研究」『下総考古学』18
鈴木徳雄　1991「称名寺式の変化と文様帯の系統－「文様帯系統論と文様帯連続説の再検討」－」『土曜考古』第16号
鈴木徳雄　1998「称名寺式の文様変化と論理－称名寺式と堀之内１式の文様構造－」『東海大学校地内遺跡調査団報告８』
鈴木徳雄　2000「称名寺式終末期と装飾帯の変化－所謂「Ⅰ文様帯」の形成と堀之内１式」『群馬考古学手帳』10
鈴木素行　1999「越の旅人　放浪篇－西方貝塚Ｂ地区第１号住居跡の彫刻石棒について－」『婆良岐考古』第21号
大工原　豊・長田友也・建石　徹　2020『縄文石器提要』考古調査ハンドブック20　ニューサイエンス社
千葉県教育委員会　1985『千葉県埋蔵文化財分布地図』(1)－東葛飾・印旛地区－
千葉県教育委員会　1997『千葉県埋蔵文化財分布地図』(1)－東葛飾・印旛地区（改訂版）－
塚本師也　2008「阿玉台式土器」『総覧　縄文土器』小林達雄編　アム・プロモーション
塚本師也　2012「第１・２回　阿玉台式土器とは(1)・(2)　阿玉台式土器－東関東に花開いた特異な中期縄文土器－」『アルカ通信』№104・106
塚本師也　2012b・2013a「第３～６回　阿玉台式土器の研究史(1)～(4)　阿玉台式土器－東関東に花開いた特異な中期縄文土器－」『アルカ通信』№108・110・112・114
塚本師也　2013ｂ・2014ａ「第７～11回　阿玉台式土器の細分(1)～(5)　阿玉台式土器－東関東に花開いた特異な中期縄文土器－」『アルカ通信』№116・118・120・122・124
塚本師也　2014b「第12回　阿玉台式土器の変遷　阿玉台式土器－東関東に花開いた特異な中期縄文土器－」『アルカ通信』№126
塚本師也　2014c「第13回　隣接する土器群との関係(1)－勝坂式土器－　阿玉台式土器－東関東に花開いた特異な中期縄文土器－」『アルカ通信』№128
塚本師也　2014d「第14回　隣接する土器群との関係(2)－大木式土器　－阿玉台式土器－東関東に花開いた特異な中期縄文土器－」『アルカ通信』№130
塚本師也　2014ｅ「第15回　阿玉台式土器の器種　阿玉台式土器－東関東に花開いた特異な中期縄文土器－」『アルカ通信』№132
塚本師也　2014f「最終回　阿玉台式土器の分布　阿玉台式土器－東関東に花開いた特異な中期縄文土器－」『アルカ通信』№134
塚本師也　2019「栃木県北部における縄文時代中期前～中葉の土器編年」『研究紀要』第27号
西川博孝他　2011「第６章　まとめ」『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書４－柏市大松遺跡－縄文時代以降編１』千葉県教育振興財団調査報告第666集
西川博孝他　2019「第５章 総括 第２節　縄文土器」『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書15－柏市小山台遺跡Ｂ区－縄文時代以降編』千葉県教育振興財団調査報告第775集
西村正衛　1972「阿玉台式土器の編年的研究の概要－利根川下流域を中心に－」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第18号
西村正衛　1984『石器時代における利根川下流域の研究－貝塚を中心として－』早稲田大学出版部
吉林昌寿　1996『千葉県成田市野毛平泉台遺跡発掘調査報告書』（財）印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第115集

001 遺物出土状況

1

3

2

4

5

8

7

SP03B土器

口縁部の欠損状況拡大